神の孫と真緑の瞳

千乃木 零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の孫と真緑の瞳

【Ｎコード】
Ｎ９５４５Ｙ

【作者名】
千乃木　零

【あらすじ】
事故に巻き込まれて死んだ蒼木龍斗は、まだ幼い頃に姿を消した祖母と出会う。祖母の正体は神様！で龍斗は転生することに！？
神の血を継ぐ少年はその瞳に何を映すのか？

初めての投稿で未熟な文章ですが、よろしくお願いします。

第一話：優しき過去

それは、過ぎ去った時、愛しく優しい記憶。

闇よりも深い青みがかった黒髪と黒曜石の瞳を持つ初老の男性が家の柱にもたれて、庭を見ている。
その視先の先に居るのは、男性と同じぐらいの年齢の女性とまだ三、四歳ぐらいの男の子だった。
女性は明るいブラウンの髪を結い上げ、自分の服を掴んでいる子供を見てセピア色の眼を細めている。子供は男性と同じ黒髪黒瞳で、女性とよく似た顔立ちをしていた。
夕焼けの空をトンボが飛び回っている姿を子供は熱心に目で追っていた。
女性がふと思いついた顔で腕を伸ばし、指を上に向ける。
すると、その指にトンボがとまった。

「わぁー。すごい。おばあちゃんそれってどうするの？僕もやりたい」

トンボが自分からやって来たことに驚いて、自分もしたいとねだる子供に女性は苦笑しながら膝を折って目線を合わせる。

「そんなに騒いでいては、トンボは近付いてきてくれないよ。優しく、心で呼ぶんだよ」

「心で呼ぶ？」

「そうだよ。命あるものには魂があり、心がある。ひとつひとつが違うものだけど、必ずあるんだよ」

子供は首を傾げながら女性を見上げている。そんな子供の様子を見て、クスクスと笑いながら女性は優しく子供の頭を撫でた。

もう、戻ることのない光景は優しく、愛しく、切ないものだった。

第二話：事故（前書き）

ええと、かなり短い文章ですがこの話と次話で異世界トリップします。

第二話：事故

「お疲れさま。お先に失礼します」

蒼木龍斗は隣の席の同僚に声をかけて、席を立つ。

手早く荷物をまとめると足早に会社を退社した。

「ふう、あつ～。もう9月になるのに、なんでこんなに暑いんだ」

会社を出てすぐに強い日差しに当てられて、思わず呻いてしまう。

しかし、文句を言っても気温に変化はないので、すぐに歩き出す。

「お～い！龍斗。こっち、こっち」

陽気に自分の名前を呼ぶ声に顔を向けると、五人の男女がこちらに向けて手を振っている。

「ごめん。待たせた？」

集まる予定のメンバーが、自分以外全員集まっているのを見て、龍斗は頭を下げる。

「え～。そんなに気にしないでよ。仕事忙しかったんでしょ？」

「そんなに長い時間待った訳じゃないぞ。俺なんて五分前に来たばかりだ。」

五人のなかで快達な感じの女性と男性から軽い返事が返り、龍斗は

顔を上げて苦笑した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

とりあえず、大学時代から常連となっているカクテルバーに行くことになり、雑談を交わしながら歩いて行く。

「でさ、その子大学生で、剣道やってるんだって。龍斗のこと話したら、すごい興奮して、質問攻めにされたんだぜ。親しくはなれたけどなんか複雑…」

話の流れで恋愛話になり、龍斗は少し居心地が悪い思いをしていた。

「そらそうでしょう。剣道の全国ナンバーワンと自分を比べてるあんたが可笑しいのよ」

「ふふ、龍斗はかっこいいからモテモテだものね」

「顔良し、頭良し、おまけにめちゃくちゃ強いとか、理不尽じゃないか？」

「いえ、あの～。龍斗君が悪い訳じゃないんだし…」

龍斗は中性的で整った顔をしているのでかなりモテる。だが、龍斗自身は告白されてもその気になれず、今まで誰とも付き合っていない。
実を言うと好みのタイプなどもよく分かっていなかった。

五人で龍斗をからかいながら、カクテルバーのすぐそばまでやって来た。
ふっと何かに気付いたように龍斗は顔を上げ、続いて顔をしかめた。

「龍斗、どうかしたのか？」

その変化に気付いた男性の一人がわずかに不安を伴う口調できく。
龍斗は目を細めて、真剣にこれから行くことになっていた2階建の建物を観ている。

「なんというか……。ここ、今日はやめた方がいいかも…」

龍斗の警戒心が混じった返事を聞いて、五人は残念そうな顔になった。だが、誰も龍斗の意見に反対しなかった。
龍斗は勘が鋭い。付き合いの長い五人は、その事をよく知っていた。前に一度、龍斗が反対したレストランに入った時に不良達の喧嘩に巻き込まれたこともあった。
全員龍斗に叩きのめされたが…。

「じゃあさ、駅の近くにできた居酒屋さんに行かない。
先輩が、料理がおいしいって、言ってたよ」
その言葉に全員が賛成し、その場を後にする。龍斗は一度振り返って、じっとその建物を見ていたが、友人の一人に呼ばれて歩き出す。
建物を見ていた龍斗の瞳には僅かに緑色の光が瞬いていた。

龍斗達が立ち去ってから暫くすると、そのカクテルバーに強盗達がはいっていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「う～ん。今日も暑いな～。でも、今日は営業で走り回る必要は無いし、昨日よりは楽かな」

一夜あけて、龍斗は仕事に向かうために通い慣れた道を歩いていた。大通りに差し掛かり信号待ちをしていると、いきなり背筋にザアーと悪寒が走った。

（なんだ？昨日よりも強い嫌な予感がする。一体どこから…）

龍斗は予感に従って僅かに緑色の光が瞬き始めた瞳を背後に向ける。

ザアー、ザアー、ザアー…

その途端頭にノイズが走り、目の前の光景が揺らぐ。揺らぐ視界の中で大型のトラックが曲がり角の内側にいたバイクに気づかず、転倒して道路上を滑って行く光景が映し出される。その光景の中、トラックが進む先には……

二人の子供が近づく脅威に気づかずに笑顔で笑い合っていた。

プツン…

唐突に視界が戻りノイズも消える。

（今のは一体？）

突然見えた光景と今目の前にあるなんの異常もない光景とが噛み合わず、龍斗は軽い混乱に見舞われた。

ふっと、目の前に伸びる道路上をこちらに向けて歩いて来る二人の子供が目に入る。

（あの子達は、さっき見えた事故でトラックが衝突した……）

混乱している龍斗の目の端に奥の曲がり角を曲がろうとしているトラックが映り込む。

（まさか！？）

龍斗は確証もない自分の予感に背を押されて走り出す。

龍斗は自分の目に時折、人に見えないものが映ることはしっていた。

だが、それはなんとなく感じる嫌な予感が視覚的に靄のようなものになって見えているだけで、ここまではっきりしたものが見えたのは初めてだった。

それでも龍斗には今見たものが確実に起こることだと確信していた。

それは本能的な確信だった。

ガッッ！

龍斗の確信を裏付けるようにトラックが並走していたバイクに気づかずに曲がり角でぶつかった。

衝突の衝撃でコントロールを失ったトラックは、自分達に危機が迫っていることに気づいていない子供達に向かっていく。

（やばい！間に合うか？）

龍斗は後先考えずに子供達を渾身の力で弾き飛ばしていた。

（良かった。間に合った）

龍斗が子供達の無事を理解した瞬間…

体に巨大な質量を持った物体がぶつかり、身体中を激痛が走り抜ける。

子供達の泣き声が聞こえたのを最後に龍斗の意識は闇の飲み込まれた。

第三話：再会（前書き）

ええと、すごく遅くなって申し訳ございません。

第三話：再会

「う～ん。どうなってんだ一体？」

龍斗は横になっていた状態から体を起こす。

「ん？体が痛くない…。俺って確かトラックにひかれて……」

気を失う直前のことを思い出して、慌てて体を確認し、傷がないことに驚いて辺りを見回す。

そこは見渡す限り真っ白な空間だった。

「ええと、ここどこ？もしかして死後の世界？」

自分で言って、つい納得しそうな結論に龍斗は乾いた笑みを浮かべた。

「しかし、こんな何もない空間にいてもどうすればいいのか分からないな……」

「龍斗！」

龍斗が頭を抱えて唸っていると、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「へ？……な！」

龍斗が声に反応して振り向くと、そこには二十代半ばぐらいの、腰

まで流れる清流のような銀色の髪と宝石のような緑色の瞳をもつ女性が、感極まったように泣きながらこちらを見ていた。
なぜこんなところに人がいるのかはともかく、女性が泣いていることに驚いて、龍斗は声をかけられないまま困惑していた。

「ええと、あの～。あなたは一体……、わぁ！？」

とりあえず、女性にここがどこか尋ねようと、龍斗が女性に話しかけると女性は答えずに駆け寄って来て、ガバッと抱きついてきた。
いきなり抱きつかれて龍斗は困惑したが、女性があまりにも嬉しそうに名前を呼びながら抱きついてくるので、無下にする気はおきず、宥めるように背中を撫でた。

……十分後。

やっと女性が落ち着き、離れてくれたので今は向かい合うかたちで座っている。

「ええと……。ごめんなさいね。いきなり抱きついて…」

女性は抱擁を解くとちょっと照れくさそうに謝罪する。
その顔にはいまだ隠しきれない悦びが溢れていて、龍斗は困惑しながら改めてその女性と向かい合う。

「……。」

龍斗は女性の顔を見て微かな違和感を覚えた。初めて見る顔のはず

なのに、なぜかは分からないがひどく懐かしい気持ちになったのだ。自分の感情の理由が分からず、龍斗はどう応えればいいのか考えつかないので、困った顔で沈黙を返してしまう。

「う～ん。何から話そうかな。久しぶりに会ったから話したいことはたくさんあるのに、時間はそんなにないのよね…。」

「え、時間がないってなんのこと？いや、それよりも……久しぶり？？」

女性は難問を考えるように顎に手を当てて思案するが、龍斗は女性の言葉の意味が分からず、つい素で質問をする。

「あ、そっか！この姿じゃあ、私が誰かなんて分かんないよね。それじゃあまずは自己紹介ね。」

そう言うと女性はどこかいたずらをたくらんでいそうな表情を面に浮かべた。

「私の名前はリーフェルシーク。時限と生命を司る月の女神よ！……そして」

女性、あらためリーフェルシークはそこで一旦言葉を止めると、徐に右手を挙げて指を振った。

すると、リーフェルシークの体を銀色の光が包み込む。

光が少しずつ消え去り、そこには……

「！？……おばあちゃん！！」

龍斗はその相手の姿を見て、驚愕の声をあげた。
その場にいたはずのリーフェルシークの姿は消え、薄いブラウンの髪にわずかに緑がかったセピア色の瞳をもつ、穏やかな雰囲気を纏う六十代ぐらいの女性がいた。
その姿は、龍斗の祖母の姿そのままだったのだ。

「フフフ…。どう？驚いた？」

先ほどよりもわずかに低くなり、落ち着きが増した声音で、リーフェルシーク……蒼木リオナが龍斗に問いかける。

「本当に…本当におばあちゃんなの？」

龍斗は信じられない思いで問い返す。
龍斗の祖母のリオナは、龍斗が十五歳の時に行方不明になっていたのだ。
彼女を愛していた祖父は、最期の時まで彼女のことを探していた。
リオナは龍斗の心情を察したのか、どこか寂しげで労るような表情を浮かべていた。

リオナは何かを振り切るように頭をふり、もう一度手をあげ、銀色の光を出現させる。光が収まった後には女神の姿に戻ったリーフェルシークがいた。

「龍斗…。改めて自己紹介するわ。私は、時限と生命の女神リーフェルシーク。そして、あなたの祖母蒼木リオナよ。」

龍斗は、明かされた事実に驚きを越えて頭が真っ白になっていた。
それと同時に、最後に祖母と別れた時の記憶が頭をよぎる。

（確か、あの時…、「また会おうね。龍斗…」て言われたような気がする……）

「どうして……？」

―女神とは、どういうことなのか？

―どうして、今俺は生きているのか？

―なぜ、俺たちの前から居なくなったのか？

幾つもの疑問が頭に渦巻き、龍斗は意味を為さない問いを発していた。

リーフェルシークは龍斗の問いに首を傾げたが、龍斗の状態を察したのか、労るように龍斗の頭を撫でた。

「ごめんね。びっくりさせて。…龍斗が納得出来るようにちゃんと説明するわ。だから、私を信用してほしいの。」

龍斗はまだ少し混乱していたが、とりあえずその言葉に頷いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「さて、まずは私のことについて、なぜ人として生活していたかを含めて話そうか？」

だいぶ落ち着いた龍斗に、リーフェルシークは隣り合わせに座って話し始める。

「あなたには言ってなかったけど、私、実は記憶喪失だったの。」

「記憶が…、つまり自分が神様だってこと忘れてたの。」

「まぁ、そう言うことになるね。」

龍斗の言葉にリーフェルシークは、顔をしかめて肯定する。
自分のことなのに忘れていたことが悔しいらしい。
だが、その表情はすぐに優しいものに変化した。
「でも、おかげで竜与（たつと）に会えたし、今こうしてかわいい孫とお話できるから、私的には嬉しい結果かな。」

リーフェルシークは龍斗に優しく微笑みながら、何かを懐かしむような顔をする。

「おばあちゃん……」

「あ！でも、神界は大変だったみたい！」

いい雰囲気は一瞬で崩れた。

（そう言えば、おばあちゃんて、かなりマイペースだったけ……）

龍斗は少しだけ泣きたくなった。

「あ、そうだ！おばあちゃん、さっきの時間がないってどういうこ

と？」

龍斗のこの質問に、リーフェルシークは数秒間フリーズ。

「あぁぁ！そうだった！！」

（忘れてたんかい！）

その反応に、龍斗は心の中でツッコミを入れる。

「ええと、実はここって神界なの。純粋な神以外は、一瞬で即死してしまうの。

龍斗の場合は、私がここに結界を張っていることと神の血をひいていることで、死なずに済んでいるんだけど……、それも半日しか持たないのよ。」

「えぇ！神界ってそんなに物騒なの！？」

自分が既に、一度死んでいることも忘れてパニックになる龍斗。

「そういう訳で、龍斗を私がいる……というか、神として存在している異世界に転生させようと思ってるの。」

「へ？異世界？」

「そうよ。私は、シリア＝グラウンドっていう世界の神なの。」

「へぇ～。」

だんだん非常識な展開に慣れてきた龍斗は、もう何でもいいという心境になっていた。

現実逃避的な意味もあったが……。

「まぁ、そう言う訳で、あなたを転生させるわ。でも、ひとつ問題があって……、そのまま転生させるわけにはいかないのよ。」

「問題ってなに？」

「実は、私に会ったことで龍斗のもつ神の力が覚醒しちゃったのよ。」

「え、神の力って俺にそんなものがあったの？」

「今までは、私が神として存在している世界じゃなかったから、力も眠っていたから関係なかったけど、私に会ったし、これからこっちの世界で暮らすなら、力も顕在することになるわ。
その力っていうのが魂に由来するものなんだけど、人の身体のままでは耐えきれなくて、制御できない可能性があるの。」

「制御できなかったら、どうなるの？」

自身に関わる不穏な話題に、龍斗は不安を感じながら、恐る恐る尋ねる。

「……死んじゃうかも？」

「……転生する意味無いじゃん！！」

龍斗は、返ってきた答えについ大声でツッコんでしまう。

「大丈夫だよ。ちゃんと対抗策は考えてあるから。」

「対抗策？」

「ええ、私が貴方に加護を与えればいいのよ。」

「加護？」

意味の分からない単語が出てきたので、龍斗は、はて？っと首を傾げる。

「加護っていうのは神が与える恩恵のようなものよ。
それぞれの神様で得られる効果は違うのよ。
ちなみに、私は不老長寿と全能力の強化よ。身体能力とか魔力とかのね。私の“加護”で強化された身体なら、神の力にも耐えられるようになるから、死ぬ心配もなくなるわ。
本当はそれを得るためには面倒な条件があるんだけど……、まぁ、龍斗は私の孫だから特別に、今から授けてあげるね。」

（いいんだろうか？）

“加護”というのは、どうやらすごいもののようだが、事情があるとはいえ、こんなに簡単に授けていいのか、当事者である龍斗も疑問に思ってしまう。

「龍斗、ちょっと立ってくれる？今から“加護”をかけるから。」

リーフェルシークに言われて、龍斗が立ち上がるとリーフェルシークが正面に立つ。
何をするのかと、龍斗が興味津々で見守っていると、リーフェルシークはおもむろに手を伸ばし、龍斗の胸元に指先で触れる。

その途端、龍斗は身体が熱くなるのを感じた。リーフェルシークが触れている場所から、凄まじい勢いで力が流れ込んでくる。
だが、それを凌駕する勢いで身体の中から、リーフェルシークが流し込んでくるものとよく似た力が沸きだし、二つの力が渦を巻くように身体中をめぐっていく。
龍斗には永く感じられたが、実際にはそれほど時間は掛からず、二つの力の渦は収まり、リーフェルシークは龍斗から手を離した。

「今の力が“加護”？」

龍斗は自身の身体が根本的に作り替えられたような感覚に戸惑いながら、一応リーフェルシークに確認する。

「う～ん。半分当たりで半分外れかな。」

「え、半分？じゃあ、残りの半分は？」

「もちろん貴方の力よ、龍斗。私の力に反応して覚醒していた力が表にでてきたのよ。
自分の身体を見てみなさいな。」

「身体？……わぁ！何で縮んでるだ！？」

龍斗は自身を見下ろして驚きの声をあげた。
今まで大人の姿をしていたのに、その姿は十歳程度の子供に変わっていたのだ。

「フフフ…。驚いた？貴方の魂は神の力があるし、私の力で不老長寿になったから、魂のあり方に共鳴して身体が若返っているのよ。」

「えっと？ということは、いまの俺の魂は人で言うと十歳ぐらいてことか。
うん？俺ってどれくらい生きることになるの？」
「そうね？だいたい３０００年ぐらいかな。魂の力からみた感じだと……。」
「はっ？３０００年！！そんなに！？」
龍斗は想像以上に長い自身の寿命に、驚きと戸惑いを覚える。あまりにも長すぎて実感が湧かないのだ。
それに、そんなに長く生きる存在は自分以外いないだろうから、色々まずいのではないかと、龍斗は危惧していた。
「龍斗。そんなに気にしないで。
これからあなたが行く世界には、超命種と呼ばれる種属がいくつも存在しているし、人も元の世界より長生きで、２００年ぐらいはいきる人が大半だから。」
リーフェルシークにも龍斗の不安は分かっていたのか、努めて明るい口調で気にしないように告げる。
龍斗も心配をかけることは、本意ではないので一応頷いておく。
「あと、胸元を見てみて。」
リーフェルシークに言われて、龍斗が自分の胸元を見ると、月と何かの植物が抽象化された紋様が浮かんでいた。
「それは私の紋章よ。ちなみに、その植物は月桂樹って言う植物で、勝利を象徴するとされているの。

最後に、龍斗、これをもって行きなさい。」
そう言ってリーフェルシークが差し出したのは、星空を閉じ込めたような、漆黒の幅広の腕輪だった。
「それは、貴方の願いのままに姿を変える力があるの。もし壊れてしまっても、貴方の力に反応してすぐに修復されるわ。貴方がこれから過ごす場所では、きっと必要になるから。」
「うん。ありがとう。大切にするね。」
「さて、名残惜しいけど、もう時間がないから、貴方を新しい世界に送るわよ。
準備はいい？龍斗。」
「うん。大丈夫だよ。」
本当は、もう少し話していたかったがそうするとますます別れ難くなるので、龍斗は頷く。
リーフェルシークも悲しげな表情だったが、一度だけ龍斗を抱きしめると、後ろに下がって距離をとり、手を祈りの形に組んだ。
龍斗の下に光の輪が出現し、龍斗の身体がその中に沈み出す。
「おばあちゃん、また会おうね！」
視界から少しずつ消えて行くリーフェルシークの姿に、龍斗が声をかけると、嬉しげな笑顔がかえってきた。
その光景を最後に龍斗の意識は闇の沈んでいった。

第三話：再会（後書き）

このお話で、プロローグは終了です。
次のお話は、転生十五年後となります。

第四話：異世界の生活（前書き）

いきなり十五年後です。一応、戦闘シーンはありますが、ただの導入なので、わくわくするようなものではないです。

第四話：異世界の生活

そこは、朝霧が立ち込める、深い森の中。まだ日も昇っていない、早朝の時間。
見上げる程の大樹が立ち並ぶ中、二つの影が疾走していた。影は二つとも人の形をしているが、前を行く方は明らかに人ではない。
緑がかった黒っぽいゴツゴツした肌にギョロリとした目をもつ、成人男性より一回り大きな体躯の“オーク”と呼ばれる魔物だ。
武器を扱う程度の知恵を持つため、中級の魔物の中でもそれなりに厄介な魔物として知られている。だが、今はその顔を怒りと恐怖に歪め、後ろから迫る驚異から必死に逃げようとしている。
もうひとつの影は、十五、六歳ぐらいの黒髪黒眼の少年だった。
まっすぐに標的であるオークを視界におさめ、凄まじい速度で滑るように駆けている。

二つの影による競争は、すぐに終わりを迎えた。
黒髪の少年の影が、オークをあと二、三メートルの距離まで追い詰めた瞬間、少年の手が漆黒の刀を振るい、その姿はオークを追い抜いていた。
少年が立ち止まって後ろを振り向くと、その視線の先で首を刈られたオークの身体が、ゆっくりと地に倒れるところだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふぅ…。やっと終わったー！」

オークを倒した少年―異世界で十五年の時間を経た龍斗は、今倒したばかりのオークから、換金部位を取り除き、もと来た道を戻っていく。

「う～ん。でも、依頼では１０匹ぐらいって、書いてあったはずなんだけどなぁ。」

龍斗が洞窟の近くにある空き地に戻ると、３０匹ほどのオークの死体が散乱していた。

龍斗は、ギルドの依頼でオークの討伐に来ていたのだが、明らかに依頼を受けた時に聞いていたオークの数よりも、多いことに首を傾げる。

「まぁ、とにかく早く町に行って、換金と依頼終了の手続きをしないとな。夕食の時間に遅れそうだし。」

考えても意味はないので、ギルドに報告すれば、依頼達成の報酬を上乗せしてもらえるかなと、考えながら換金部位を集めていく。

「よし、これで全部かな？」

龍斗は、作業を終えると換金部位を入れた袋を担ぎ、山を降りるべく麓に向けて歩き出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ここはウェステ大陸の東北に存在する国、セーリオン王国。
海に面した国で、シジク諸島郡と呼ばれる大小の島々が並ぶ諸島が近くにあるため、交易が盛んな国である。

付け加えると、この世界には、ウェステ大陸のほかにノースレリア大陸、イルスティス大陸の二つの大陸が存在する。
また、この世界は地球とは時間において違いがある。
この世界の一年は４５０日あり、４５日ずつ１０ヶ月で構成されている。また、一日の時間は２５時間となっている。

閑話休題

龍斗は拠点として、セーリオン国の第二の都市とうたわれる、フィゼルの街のギルドを利用している。
街を囲む城壁の門で、守衛の人達にギルドに登録している証である腕輪を見せて、龍斗は街に入る。
もうすぐ夕方になるため人が多く、混雑している市場の間を、今夜の夕食の献立と購入しなければならない食材を考えながら歩いていく。

通い慣れた道を歩いていると、目的地である冒険者ギルドが見えてきた。

そこは一見すると、少し大きな酒場のような建物だった。

看板に双剣とイバラが意匠化したギルドのシンボルマークがなければ、そこがギルドだと分からないかもしれない。
龍斗は慣れた様子でギルドの扉を開いて中に入り、奥のカウンターへ向かう。
「よぉ、龍斗。今日はいつもより遅かったな。」
龍斗がカウンターの前にいくと、そこに居た藍色の髪の男性が気安い様子で話しかけてくる。
「ただいま、ダンテさん。ちょっと今回の依頼で話しておきたいことがあるんですけど、換金の後に時間はありますか？」
「あぁ、少しぐらいなら大丈夫だ。」
龍斗の言葉に頷くと、このギルドのマスターであるダンテ＝ベルナードは、手早く龍斗が持って来た魔物の部位を鑑定していく。
鑑定が終わると、換金した分と依頼料を受け取り、龍斗は他のギルド員に仕事を交替したダンテと共に二階のマスターの応接室に場所をうつす。
「で、気になったことは何だ？」
応接室のソファーに向かい合わせで腰かけると、ダンテが龍斗に話の内容を問う。
しかし、ダンテも内容は察しがついているようで、一応確認のために訊いている感じだった。

（やっぱりおかしいと思うよね。）

「換金されたなら、俺が言いたいことは分かりますよね？」

「やっぱりか～。で、実際はどれぐらい違ったんだ？」

予感が的中したと知って、顔をしかめるダンテ。

「依頼書に書かれていた数の、およそ三倍ぐらいでした。養父から魔術を学んでいる俺は平気でしたが、あの依頼は本来Ｄではなく、Ｃランクの依頼になると思います。」

ギルドには冒険者と依頼にそれぞれＨ、Ｇ、Ｆ、Ｅ、Ｄ、Ｃ、Ｂ、Ａ、Ｓ、ＳＳと１０段階に分けたランクがついており、だいたい一人前の冒険者でＤランクぐらいである。

龍斗自身のランクはＤランクだが、まだ登録して一年ほどなので、ランクアップは結構早いほうだ。

「ハァー、すまん。こっちの調査不足だな。迷惑かけたようだから、報酬にいろをつけとくよ。
しかし、こう何度もこんなことがあるとギルドの信頼に関わりそうだな。」

「ん？ちょっと待って下さい。他にもこんなことあるんですか？」

龍斗の報告に肩を落とすダンテに、龍斗は気になった部分を聞いてみる。

「ん～、確証はないが、この頃魔物の繁殖が異常にはやくなってところがあるんだよ。
ギルド内では、もうすぐ日食がくるからその影響だろうてことになってる。
実際昼に起こる日食の時には、いつもより魔物が凶暴化しやすくなるって、記録もあるからな。」
「へ～、そうなんですか。初めて知りましたよ。」
「昼間に日食が来るのは、数十年に一度くらいだからな。知らないやつの方が多いのさ。」
龍斗はダンテの言葉になるほどと頷いて、女性のギルド員が淹れてくれたお茶を飲む。
「それと、今回の依頼がCランク相当だとすると、お前のランクがCに上がるな。」
「そうでしたっけ？」
「張り合いのないやつだな、おい。普通ならCに上がるには才能があるやつでも１０年以上はかかるってのによ。」
ギルドのランクは、ひとつ上のランクの依頼を五回成功させなければ昇格できない。また、バランスをとるために、自分のランクと同じランクの依頼を十回以上は受ける必要がある。
チームで依頼を受ける場合、人数で割った数しか加算されない。―例えば、五人で受けると１／５回と数えられる。―
簡単な依頼なら、単独で達成するのも難しいことではないが、難しい依頼ほどある程度の人数で行うのが普通である。

そのため、ランクが上がれば上がるほど、昇格が難しくなるのだ。
「俺の場合は、ずっとソロでやってますからね。他の人より早いのは当たり前でしょう？」
「……ずっとソロでやれてるところが、当たり前じゃないんだが…。まぁ、なんにせよ、お疲れさん、龍斗。」
ダンテの労いの言葉に、龍斗は笑って頷いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ただいまー！遅くなってごめんね、父さん。」
「おかえり、龍斗。」
龍斗の帰宅の言葉に、父さんと呼ばれた赤髪に琥珀の瞳の初老の男性クゼン＝フォーリアは、杖を磨きながら言葉すくなに応じる。
端から見ると素っ気ないと思われそうだが、クゼンが元々寡黙な質だと知っている龍斗は、気にせず台所に向かう。
台所のテーブルに買ってきた食材を出し、夕食の準備に取りかかる。
龍斗は、転生する前から料理はそれなりに好きだったので、味はかなりのものである。
また、料理の種類は元の世界の方が豊富であったため、クゼンも龍

斗の料理を気に入っている。
龍斗が料理当番になるのは、自然の流れだったのだ。

龍斗は手早く料理を作っていき、テーブルに並べるとクゼンを呼んで夕食を食べ始める。

夕食の時間はいつものように、龍斗が今日あったことを話し、クゼンが相づちをうちながら聞いている。

二人とも食べ終わると、龍斗が片づけをするために食器を水洗い場に移動させる。

「龍斗、この後話がある。片づけを終えたら、居間に来なさい。」

「は～い。」

養父が夕食中に話さず、改めて居間に呼んだことに、何か大事な話かもしれないと思いながら、龍斗は頷いて片づけのスピードを早めた。

龍斗が片づけを終えて居間にいくと、クゼンはソファーに座って、目の前のテーブルに置かれた手紙を見ていた。

龍斗は手紙が未開封である様子をみて首を傾げながら、対面のソファーに座った。

「龍斗、これはそなたに届けられた手紙だ。」

「俺に手紙ですか？」

クゼンは龍斗が来たのをみて、口を開いた。その言葉に、龍斗は戸惑いを隠せなかった。

龍斗とクゼンが暮らしている家（屋敷と言ってもよい大きさだが）は森の奥の泉を支点とした結界の中にある。

元冒険者であり、一流の魔導師であったクゼンが、国の勧誘などを煩わしく思って住んでいる場所なので、周りの森はそれなりに腕のたつものでも、一日ですら居られないような魔物の住みかなのだ。

クゼンに魔法を教わった龍斗は、今は単独で転移を使い、街と家を往復しているが、基本的に二年ほど前までこの森で修行に集中していたため、知り合いといえる人は数えられるほどしかいない。

そんな自分に手紙が来るだろうかと考え、龍斗はあることに思い至る。

「もしかして、学園からの試験結果ですか！？」

「そうだ。まだ中は見ていないから、開けてみなさい。」

「はい！」

龍斗は新しい人生を生きるこの世界をもっと知りたくて、ウェステ大陸一と言われるリーオニア国立学園の入学試験を受けたのだ。

その結果が届いたと知り、急いで封をあけ、さっと目を通す。

「やった！合格だ！！学園にいけるんだ！！」

龍斗が喜んで報告すると、クゼンは頬を緩めて頷く。

つかの間、二人で喜び合う。

「ところで、龍斗。きちんと指輪はつけておるか？」
クゼンのその言葉に、龍斗は自分の胸元を押さえる。今龍斗が右手につけている指輪には、胸元にある紋章が見えないようにする効果があるのだ。
「そうか。分かっておると思うが、そなたの出生や“加護”は隠さねばならない。強すぎる力は、欲望を引き付けてしまうからな。よいか、龍斗。本当に信用出来るもの以外に知られないようにしなさい。
自分だけでなく、周りにも被害が出るかもしれないからな。」
「うん。分かってる。俺の力は使い方を間違えれば、いろんなものを簡単に壊してしまうから、気をつけるよ。」
クゼンの言葉に、龍斗は素直に頷いた。そんな龍斗の様子に、クゼンは優しい眼差しを向けた。
「一応注意はしたが、そなたなら大丈夫だろう。
明日から準備で忙しくなるから、早く寝るといい。時期的には、少し余裕を持って今週中には学園に向かったほうが良いからな。」
「うん。おやすみ、父さん。」
「あぁ、おやすみ。」
話を終え、龍斗は自分の寝室に移動していく。
その姿をクゼンは寂しさが混じった表情で見送る。

（別に今生の別れではないのに、一時とはいえあの子と離れるのがこんなに寂しいとは……、いつの間にか本当の子供のように思っていたのだな……。）

クゼンはそんなことを思う自分に苦笑した。
龍斗は転生者であり、自分より下と言っても、出会ったころから大人といってより年齢だったのだ。
しかも、神の……それも三大神の一角リーフェルシークのまごなのだ。
本来なら、クゼンの態度は神に対する冒涜ととられても、おかしくない。
だが、この十五年間龍斗と暮らしてきて、たっぷりと情が移ってしまっていたのだ。

クゼンはこれから五年間は、長期休暇の時しか龍斗が戻らないことを思い、深い溜め息をついたのだった。

第四話：異世界の生活（後書き）

作中に日食の話がありますが、周期とかはお気になさらずに読んでください。
この世界は時間軸が違う設定なので、これからも違和感があるときがあるかもしれません。

第五話：旅の出会い（前書き）

ええと、かなりのスローペースでごめんなさい。
今年もよろしくお願いします。

第五話：旅の出会い

背の低い草に覆われた草原を一台の馬車が走っている。四人乗りの小さなものだが、作りはしっかりしており、御者の席には、黒髪の少年が座っている。その少年―龍斗は欠伸を噛み殺しながら、馬車を動かしていた。

龍斗にとっての第二の故郷であるフィゼルを出て、二日がたった。リーオニア国立学園までは、だいたい馬車で二週間ほど行くとたどり着く距離なので、まだまだ先は長い。

「ふぅー。結構暇だな。そういえば、長旅って初めてだったような……、父さんと依頼で遠出したときは、長くても一週間ぐらいだったよな。」

龍斗は体力が高いので、長旅でもそれほど疲れることはない。だが、延々と馬車を走らせるだけというのはかなり退屈で、精神的に疲れを感じてしまっているのだった。

龍斗が、退屈すぎてぼんやりした気分のまま、意味もなく辺りを見回していると……、

（……っん！？）

龍斗は右側に視線を向けたとき、そちらの方から強い魔力活性化の

気配を感じた。

（遠いっ！ここからじゃ、何があってるのか分からない！）

この辺りはそれほど強い訳ではないが、たまに魔物の群れがでると、昨日通って来た村で注意されたのを思い出し、誰か襲われているのではないかと、焦ってしまう。

（落ち着け、こういうときは……。）

龍斗は目を閉じて、己れの中にある魔力とは異なる力に集中する。

自らの力が働き始めたのを感じ目を開けた龍斗には、遠くの方で多数の魔物に襲われている人の姿が見えていた。

その光景を視認した途端、龍斗は馬車ごとその近くまで転移していた。馬車から飛び降り、助けに入ろうとする。

その瞬間……、

（何だ……？魔力が……やばいっ！）

いきなり大量の活性化した魔力が術式を編んでいるのに気付いて、近づこうと走っていた足を急停止させる。

その尋常ではない魔力の発生源に目を向けると、襲われていた人―銀色の髪の同年代ぐらいの少女が全身に魔力を纏って立っていた。目を閉じて必死で術式を編んでおり、龍斗に気づいていない。

（これは、まずいな。）

龍斗が焦っているのは、少女の魔法が魔物に効かないと思ったからではない。
少女の魔法の威力は申し分ない。というか寧ろ、威力が高すぎるのが問題だった。このまま発動すれば、間違いなく少女やそばにいる龍斗も巻き添えになるだろう。
龍斗は肉体が強化されているため、死ぬことはないが、少女の方が耐えきれないのは一目瞭然だ。

龍斗はそれだけのことをみてとると、瞳に集中し、タイミングを計り始める。

（……よし、いまだ！）

少女の術式が発動し、出現した業火が魔物達を飲み込む。
その炎が少女を飲み込む寸前、龍斗は待機させていた術式を発動。
水の膜が炎を包み込み、消し去る。

その結果を確かめると、龍斗は少女の方へ駆け出した。

龍斗が少女のそばまで行くと、少女は頭を両手で押さえてしゃがみ込んでいた。
おそらくは先ほど自分が放った魔法の衝撃に耐えようとしたのだろう。
龍斗が困った顔で少女を見下ろしていると、いつまで待っても衝撃がこないことをおかしく思ったのか、少女はそろそろと頭をあげた。

大きめの水色の瞳が龍斗を視界におさめる。
人がいると思っていなかったのか、そばに立っていた龍斗を見て、ビシッと固まってしまう。

（わぁー、綺麗な子だな。）

少女の容姿はかなり整ったもので、色素の薄い色合いはどこか透明感のある雰囲気を醸し出している。

「ええと、怪我はない？」

とりあえず、龍斗が怪我の有無を聞いてみると、まだ状況が読み込めていない少女は呆然としたようすで、首を横にふった。

「そう、よかった。しかし、さっきの魔法は凄い威力だったね。下級の術式で、あんな威力だせる人はあまり多くないよ。」

龍斗は困惑した様子でこちらを見ている少女に、緊張をとる意図を含めて出来るだけ軽い様子を作って話しかける。
その言葉で何となく状況を察したのか、少女はようやく口を開く。

「もしかして、あなたが助けてくれたのですか？」

「魔物を倒したのは、君だよ。俺は魔法の被害が君に及ぶのを防いだだけ。」

おずおずと問いかけてくる少女に、龍斗は笑って答える。

「それでも、あのままでは私も大怪我を負っていたでしょう。下手をすれば死んでいたはずです。

助けて頂いてありがとうございます。」

そう言って、ペコリと頭を下げる。少女の礼儀正しいお礼にどこか微笑ましい気持ちを持ちながら、龍斗はどういたしまして、と返礼した。

「とりあえず、自己紹介といこうか。俺は龍斗、リュート＝フォーリア。
よろしく。」

「ん？リュウト？リュート？……どっちが正しいのですか？」

「龍斗が元の名前で、リュートのほうが今の名前。ちょっと事情があって、名前が変わったんだ。」

「どっちで呼んだ方がいいですか？」

名前が変わったと聞いて、少女は首を傾げたが、龍斗の何でもないといった態度に気にしないことにしたらしい。

「君の呼びやすいほうで構わないよ。」

「そうですか。では、リュートと呼ぶことにいたします。
私の名前はリオーディナ＝ラッシュ＝リューシフェリアです。リオと呼んでください。」

「分かった。ところでリオ、こんなところで何してるの？」

自己紹介が終わったところで、龍斗は気になったことを訊いてみる。
リオのそばには、小さなカバンがひとつあるだけで、こんな草原のど真ん中にいるにしては軽装過ぎるのだ。
龍斗の問いかけにリオは、ばつが悪いといった表情になる。
「実は、魔物に襲われた時に乗っていた馬が大半の荷物ごと逃げてしまって……。」
そう言ったリオは、どこか心細い様子をしている。
「せっかくリーオニアの学園に受かったのにこんなことになるなんて……」
リオの表情はどこか悔しそうだった。
「んっ？それって、リーオニア国立学園のこと？
受かったってことはリオも新入生？」
「リオも？もしかして、リュートもリーオニアの新入生なのですか？」
「そうだよ。
ところでリオ、提案だけど目的地が同じなら、一緒に行かない？」
「いいんですか！？」
龍斗の提案に、リオは嬉しそうに確認してくる。
「かまわないよ。実は、一人で長旅するの初めてで、暇を持て余してたんだ。旅のお供ができるのは大歓迎だよ。
それと、敬語は無しでいいよ。」

「ありがとうございま……じゃなかった、ありがとうね、龍斗。」
そう言って、リオは可憐な笑顔を浮かべた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「リュートは、今何歳なの？」
「う～ん、十五歳かな。（正確には、転生してからの期間だけどね）」
一緒に行くことが決まってからしばらくして、二人は馬車の御者席に座って話している。
「え！ということは、規定の最低年齢で受かったの？
落ち着いた感じがするから、もう少し上かと思ってた。
私なんかもう三十八なのに、落ち着きがないてよくいわれるのに……。」
「え～！？三十八！うそー！！」
リオの言葉に、龍斗は驚いてリオの方を見る。リオの顔はしまったーと、でかでかとかかれているような表情になっていた。

「ええと、実は私、両親は人間なんですけど、エルフの血が先祖がえりしてるらしいの。」

リオはそう言って、くせのない腰まで伸びている髪を耳にかけた。露になった耳はエルフの特徴である横向きに尖ったものだった。

「なるほど。先祖がえりか～。知り合いのエルフと雰囲気が違うのは、そのせいか。」

（まさか、実年齢が同じとは思わなかった……。）

龍斗は二十三歳のときに転生したため、正確にはリオと同い年なのだ。

「知り合いにエルフがいるの？」

リオは龍斗にエルフの知り合いがいることに、驚いた。

エルフ族はウェステ大陸の北西にある水流の森に住んでおり、他の種族との交流は極端に少ない。

「俺の知り合いというよりも、父さんの知り合いなんだ。小さい頃から、よく家に訪ねてきたから、薬学とかを教えてもらったりしたんだ。」

「へぇ～。雰囲気が違うって言ったけど、純粋なエルフってどんな風なの？」

自身がその血を継いでいるとはいえ、滅多に会えない種族なので、リオは興味津々だった。

「そうだな。一言でいえば、神秘的かな。俺が知ってる人は武術もかなりの腕だったから、それに加えて、研ぎ澄まされた刃みたいな雰囲気もあったけど、それはエルフの特徴って訳じゃなさそうだしなあ。」

「私との共通点とかはある？」

「うん。結構あるよ。色素が薄くて透明感のある容姿とか、密度の高い魔力とかね。」

「やっぱり、エルフ族は魔力が高いんだね。」

リオの声音が変化し、どこか切なさを帯びたものになる。
その変化に龍斗は、先ほど見たリオの魔法を思い出す。確証はないが、いまのリオの表情と繋がりがあるようにかんじたのだ。

「リオ、話したくないなら別にいいけど、話すだけでも楽になることもあるよ。俺でよければ、教えて。」

龍斗の言葉にリオは少し迷うそぶりをみせたが、ひとつ頭を振って話し始めた。

「実は、私は生まれつき魔力の量も密度も非常に高くて、威力の調整が上手く出来ないの。
直したいと思ってるんだけど、練習するにも危なくて、ほとんど魔法をつかったことがないの。
リーオニア国立学園なら私の魔法でも、壊れない練習場ぐらいあるだろうし、優秀な魔術師がたくさんいるから調整の技術も出来るようになるかなと思って……。」

魔法を形作る要素は幾つかあり、基本的には、術式、イメージ力、魔力の量、魔力の質があげられている。
ここで重要なのは、魔力の量と質が全く別の要素であることである。さらに言えば、術式によって必要な魔力量は決まっており、余分に魔力を込めても魔法の威力は変わらない。魔法の形状、属性、範囲などの情報は術式に記述されており、その現象に必要な魔力量は決まっている。
一方、魔法の威力のみは魔力の質（密度や純度をさす）によって左右される。
魔力の量と質は完全に生まれつきのものだ。魔力を持たないものは存在しないが、この二つの要素は人によって隔たりが大きい。
そのため、魔法は才能が大事な技能とされているのだ。

しかし、量はともかく、質は高いほどよい訳ではない。
あまりにも質が高いと、威力をおさえることが難しくなり、術者や周りを危険にさらしてしまうためだ。
威力を抑えるには、“拡散”と呼ばれる技術の習得が必須だが、この技術は難易度が高く、身につけるのに長い修練がいるのだ。

（修練って言っても、あの威力じゃ下級の魔法すら被害が出そうだな。修練自体ができなかったなら“拡散”の技術が習得できてないのも当たり前か。）

落ち込んでしまっているリオを見て、龍斗はどうすればいいか悩んでいた。

（まだまだ学園は遠いし、基礎だけなら出来るかな。）

龍斗は、自分の結論をまとめると、まだ落ち込んだままのリオの肩

を軽くたたいた。
リオがこちらを向いたのを確認して、下級の魔法の術式を編み始める。不思議そうに見つめてくるリオの気配を感じながら、素早く術式をまとめると、その魔法を空へ放った。

ゴォォォォォ！

次の瞬間、空に巨大な火の玉が出現した。リオが魔物に対して使用したものと同じ魔法が、リオのものと同等かそれ以上の威力で発動する。

「……うそ、」

その様子をリオは唖然として見上げていた。

「もし良ければ、学園に着くまで、俺が魔法を教えようか？」

リオが龍斗に視線を戻すと、龍斗は同じ術式で掌の上に直径十センチぐらいの火球を出現させていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9545y/

神の孫と真緑の瞳

2012年1月3日01時50分発行